

承認	議長	副議長	事務局長	総括参事	合議	担当
					 	

様式第1号

令和7年9月16日

真庭市議会

議長 長尾 修 様

真庭市議会議員 森脇 正和



調査研究、研修会、要請・陳情活動届

政務活動費を使用して、下記のとおり研究、調査等を行うことについて届けますので、承認願います。

記

1 区 分 調査研究 研修会 要請・陳情活動

2 訪 問 先

栃木県宇都宮市宮みらい1-20

ライトキューブ宇都宮

3 内 容

第87回全国都市問題会議

基調講演・主報告・一般報告・パネルディスカッション

行政視察

4 行 程

別紙のとおり

5 事務局から訪問先への依頼

必要

不要

(注) 複数の議員で実施する場合、代表者の届けでよいが、参加議員名簿を添付すること。



参加議員名簿

日にち：令和7年10月8日、9日、10日

No.	名 前	会 派 名	備考
1	もりわき まさかず 森脇 正和	りよく しん かい 緑 真 会	代表者
2	い どう よしのり 伊藤 義則	りよく しん かい 緑 真 会	
3	に し た ふみこ 西田 文子	りよく しん かい 緑 真 会	
4	に が た と も こ 苦田 智子	りよく しん かい 緑 真 会	
5	むら か み よし ひ こ 村上 善彦	きょう せい 共 生	

行程表（令和7年10月8日、9日、10日）

日付	時刻	分類	内容	備考
10/8	12：30	移動	久世本庁舎→落合IC→岡山IC→岡山駅	中国道 岡山道
	14：20	移動	岡山駅→東京駅→宇都宮駅	山陽・東海道新幹線 東北新幹線
		宿泊	ホテルニューイタヤ	栃木県宇都宮市大通り2-4-6 TEL：028-635-5510
10/9	9：30	研修会	第87回全国都市問題会議	〒321-0969 栃木県宇都宮市宮みらい1-20 ライトビル宇都宮 TEL：028-611-5522
	17：00	宿泊	ホテルニューイタヤ	同上
10/10	9：30	研修会	第87回全国都市問題会議	同上
	11：50	視察	行政視察 Eコース	宇都宮市内
	17：21	移動	宇都宮駅→→東京駅→岡山駅	東北新幹線 東海道・山陽新幹線
	22：10	移動 (自動車)	岡山駅→岡山IC→落合IC→久世	岡山道 中国道

報 告 書

令和7年10月23日

真庭市議会議長 長尾 修 様

報告者 真庭市議会議員 氏名 伊藤 義則



下記のとおり政務活動費を使用して 調査研究・研修会・要請陳情活動をしましたので、その結果を報告いたします。

1 日 時	自 令和7年10月 9日 午前9時30分 至 令和7年10月10日 午後4時40分
2 場 所	ライトキューブ宇都宮 ----- ----- -----
3 用 件	第87回全国都市問題会議 ----- ----- -----
4 概 要	別紙のとおり ----- ----- -----



第87回 全国都市問題会議

テーマ「生熟社会の都市のかたち」コンパクトで持続可能なまちづくり

場所

宇都宮

参加者

伊藤義則

10月9日 9:00~	基調講演「人口減少・生熟時代の都市とまちづくり」京都大学名誉教授 広井良典 氏 1.中心市街地再生と商店街の復権 (人口20万人以下、30~50万人規模の街) a)今、日本の各地で中心部が「シャッター通り」「空洞化」している。一方で若者がカフェやコワーキングスペースなど「コミュニティの拠点」として商店街に関心を向けるケース b)遠くのモールに車で買い物に行くのが難しい高齢者が、自然な形で中心市街地に足を向ける流れ c)道路と自動車中心に作られてきた都市・地域モデルではなく、人がゆったりと時間を過ごし、またそこで様々なコミュニケーションや創発が生まれるコミュニティ空間としての「ウォーカブル・シテイ」(歩いて楽しめる街)を求める動きも各地で活発に起こりつつある。 これらに共通しているのは、都市の中心市街地、商店街を魅力ある「コミュニティ空間」として再生させる発想である。 2.AIを活用した未来シミュレーション 具体的には、日本社会の現在・未来にとって重要と考えられる約150個の指標(人口、経済、高齢化、エネルギー等)からなる因果連携モデルを構築し、AIを用いたシミュレーションにより、2018年から2052年までの35年にわたる約2万通りの未来予測と分析を行った。 1)結果、2050年に向けた未来シナリオとして「都市集中型」と「地方分散型」のグループがある。 「都市集中型」シナリオ 主に都市の企業が主導する技術革新により、人口の都市への一極集中が進行し地方は衰退する。出生率の低下と格差の拡大が更に進行し個人の健康寿命や幸福感は低下する一方で、政府支出の都市集中により政府の財政は持ち直す。 「地方分散型」シナリオ 地方へ人口分散が起こり、出生率が持ち直して格差が縮小し、個人の健康寿命や幸福感も増大する。但し、地方分散シナリオは政府の財政あるいは環境(CO²排出量など)を悪化させる可能性を含むため、このシナリオを真に持続可能なものとするには細心の注意が必要となる。 2)8~10年後までに「都市集中型」か「地方分散型」かを選択して必要な政策を実行すべきである。 持続可能性の観点から、より望ましいと考えられる地方分散型シナリオへの分岐を実現するには労働生産性から資源生産性への転換を促す環境課税、地域経済を促す再生可能エネルギーの活性化、まちづくりのための地域公共交通機関の充実、地域コミュニティを支える文化や論理の伝承、住民・地域社会の資産形成を促す社会保障などの政策が有効である。 ⇒本研究について公表以降に、多くの問い合わせがあり「真庭市」も同様のシミュレーションや共同研究等を行っている。 2018年6月真庭市は、自治体SDGsモデル事業で先進国29都市と先導的取組の10事業に選ばれた。 「一極集中」「地方分散型」「多極集中」を議論し共有しつつ、まちづくり、中心市
----------------	---

街地再生、商店街復権、公共交通、若者支援、人口減少対策、社会保障改革などさまざまな公共政策を総合的に展開することが求められている。

10:50~

主報告 宇都宮市長 佐藤栄一 氏

「人口減少社会に対応する都市の構造変革」100年先も発展出来るネットワーク型コンパクトシティの形成（NCC）

1.宇都宮市の持続可能なまちづくり

- a)H19年度に策定した「第5次宇都宮総合計画基本構想」でこれからの人口規模・構造や都市活動に見合った都市の姿である「ネットワーク型コンパクトシティ」（NCC）を長期的な方向性として位置付ける。
- b)中心部と周辺の各地域の維持発展をめざす。本市の骨格となる交通網から日常生活を支える交通網まで階層のある交通ネットワークによって拠点間を連携・補完するネットワーク化の促進を一体的に進める。この「拠点化」と「ネットワーク化」により、コンパクトなエリアで日常生活に必要な機能が充足し、市民生活の質や都市としての価値や活力を高めることができる都市を実現する。

2.NCC形成に向けた取組

a)拠点形成・拠点性の向上

- ・都市機能（高度専門病院、大規模商業施設等）を集積する高次都市機能誘導区域を定める。
- ・その周辺、鉄道駅の周辺に都市機能誘導区域や市街化調整区域の地域拠点を定める。
- ・誘導施設の一部助成等により、幅広い都市機能（病院、スーパー、子育て支援施設）の誘導・集積を図る。
- ・公共交通の利便性の高い地域に住居誘導地区を定め、一部助成により居住密度の維持向上を図る。

b)ネットワーク化の促進

- ・基幹公共交通「ライトライン」の整備と効果。
地域新電力会社「宇都宮ライトパワー株式会社」が供給する、家庭ごみ等の売却によるバイオマス発電などの地域由来の再生エネルギーのみで走行する「ゼロカーボントランスポート」であり、人と環境に優しい運行を実現している。
- ・ライトラインの利用者数は、2年目で約1.7万人~1.9万人で地域の移動手段として定着している。また、自動車からのライトラインへの転換台数は約5,000台/平日.1日で鬼怒通も2,000台減少している。
- ・ライトライン沿線の住居人口が10%増加し、住宅地の地価は14%上昇している。
- ・沿線にある清原工業団地では投資額が1,100億円を超えている等。
- ・ライトラインをJR西側へ延伸し、様々な交通手段が連携するトランスジェットセンターを整備する。ライトラインと重複する既存バス路線を再配置する。
- ・誰もが市内のどこにいても公共交通で便利に移動できる環境整備を進めている。

c)NCCを土台としたスーパースマートシティの実現に向けた取組

- ・「宇都宮市地域で支え合う自治会条例」を制定し自治会の持続と活性化の取組を強化している。
- ・人、モノ、情報の交流をNCCが促進し、地域内で経済が循環する豊かな世界を目指す
- ・ライトライン、路線バス、地域内交通のEV化で2050年「ゼロカーボンシティ」を目指す。
- ・人づくりとデジタル技術の活用でスーパースマートシティを実現する。

13:10~	一般報告 東洋大学国際PPP研究所 南 学 氏 1.生熟社会における公共施設マネジメントは「縮充」で ・公共施設の再編成（総面積と固定費の削減）が都市の持続発展に重要課題の一つとなっている。「縮充」がキーワードとして活用できる。 2.なぜ公共施設マネジメントがすすまないのか ・総務省が2014年に「公共施設等総合管理計画」策定を要請して10年経過したが、削減計画は順調に進んでいない。 ・公共施設マネジメントの第一歩は、主たる施設を包括的点検、修繕委託を民間ビルメンテナンス会社へ委託する。包括委託の基本は安全確保あり、日常的に収容施設を巡回点検することが重要になる。 3.固定費の削減を図る。 ・包括委託により、施設の劣化状況に関する情報を一元管理し、大規模修繕や更新の優先順位を明確にする。 ・ダウンサイジングに取り組むのも一つの方法。
14:30~	一般報告 高松市長 大西秀人 氏 1.高松市が直面した都市課題 ・本市は、四国地方における行政・経済の中心として発展をとげてきた。人口が急増し郊外に住宅地やショッピングセンターが次々に開発され、市街地は拡大の一途をたどった。バブル経済の崩壊後、中心市街地では商業施設の集客力が低下し郊外大型店へ顧客流出が進行した。 ・本市の象徴とも言える丸亀町商店街では、人影が減り、空き店舗率が20%に迫る状況になった。地域経済の衰退とともに、まちなかにおける暮らしの魅力も低下し、若年層や子育て世代の中心市街地離れが加速した。 ・都市の拡大を前提にした従来の都市計画や開発手法が限界を迎えた。 ・郊外に住宅や商業機能を分散させる都市構造は、生活の利便性を高めた反面、まちの一体化を損ない、公共交通やインフラ維持に多大なコストを強いいる結果になった。 2.丸亀町商店街再生の背景とプロセス ・丸亀町商店街の空洞化が急速に進行し、同商店街の若手商業者たちが、地元主導の再生プロジェクトをスタートさせた。 ・地元の「まちづくり構想」＋「買い物」＋「暮らす・支える」（都市空間）を高松市と連携して再生プロジェクトを進めた。 ・丸亀町商店街の再生は、官民協働で実現された先進的な都市再生モデルである。長期的な視点に立ち、地域の課題を自ら掘り起こし、当事者がリスクを取りながら未来を切り開いた。 3.成果と教訓 ・都市の回遊性とにぎわいの創出され、買い物の場から滞在・交流の場へと転換したことで市民や観光客の滞在時間が伸び、丸亀町全体の歩行者通行量は再開発開始前に比べ2倍近く増加した。空き店舗率も改善され5%前後で推移している。 ・再開発ビルには商業施設だけではなく、分譲住宅、クリニック、子育て支援施設など生活機能が導入され「歩いて暮らせる都市構造」が具現化された。 ・一般的な再開発では、行政やデベロッパー主導が多いが丸亀町では住民・商業者・地権者が一体となり、まちの将来像を描き、具現化された。 ・「まちづくりは行政がやるものではなく、市民が担うものである。」 4.終わりに ・人口減少や経済の成熟化は、衰退を意味をするものでなく、「質の高い暮らし」や「人に優しい都市」を再構築するための転換点となりうる。

	・今後も、まちづくりを市民とともに「共創のまちづくり」をすすめる。
15:00~	一般報告 早稲田大学教授 森本章倫 氏 1.コンパクトシティに向けた施策 ・都市計画制度は、人口増加期に肥大化する都市の健全な発展を前提に定められており都市の衰退に効果的に機能するかは懸念が残る。特に地方都市は自動車利用に過度に依存しており、土地取得が容易で魅力的な場所である。コンパクト化政策を進めるためには、従来の都市計画制度に加えた立地誘導策が必要である。 ・土地利用と交通は都市を構成する2大要素である。徒歩の時代は歩いて暮らせる範囲で市街地が形成されており、鉄道の時代には街の中心は鉄道駅の位置にあった。マイカーの時代には郊外に市街が広がり、都市の人口密度は低下した。 2.次世代の交通システムのデザイン ・自動車に代わる新たな交通機関とは？ セグウェイのようなパーソナルモビリティ、ライドシェア、自動運転車の普及。交通機関が情報通信技術（ICT）で結ばれ、シームレスに利用できる「人中心の交通システム」であると思われる。重要なことは、交通システム全体のデザインとなる。都市を賢く縮退させるためには、コンパクトシティを支える交通戦略を立案すべき。 ・集約エリア⇒徒歩を中心にウォーカブルなまちづくりをめざす。 非集約エリア⇒自転車、パーソナルモビリティなどを活用しつつライドシェア出来る自動運転車を先行的に導入する。都市内の移動は次世代型路面電車システム（LRT）快速バスシステム（BRT）、自動運転バス等定時制と利便性を備えた次世代公共交通を導入する。
10/10 9:30~	パネルディスカッション 関東自動車（株）代表取締役社長 吉田 元 氏 ・生熟社会における公共交通ネットワークの進化と持続可能への挑戦 まちなか広場研究所主宰 山下裕子 氏 ・「いくつになっても」「出かけていけ」「出かけたい」都市について思案する。 北海道室蘭市企画財政部長 高橋知規 氏 ・室蘭市におけるコンパクトなまちづくりー課題解決先進地の挑戦ー 鳥取県米子市市長 伊木隆司 氏 ・歩いて楽しいまちづくりー公共交通と歩行者中心の持続可能なまちー ゆっくり移動すれば「楽しい」「気分が良い」 「楽しく」人が集まるところへ行きたい 拠点をつなぐネットワークの考え方が生熟社会では重要

報 告 書

令和7年10月24日

真庭市議会議長 長尾 修 殿

報告者 真庭市議会議員 氏名 苦田 智子 

下記のとおり政務活動費を使用して 調査研究・研修会・要請陳情活動をいたしましたので、その結果を報告いたします。

1	日 時	自 令和7年 10月 9日（午前）9時30分 至 令和7年 10月 10日（午後）4時40分
2	場 所	栃木県宇都宮市宮みらい1-20 ライトキューブ宇都宮（宇都宮駅東口交流拠点施設）
3	用 件	第87回全国都市問題会議 テーマ 成熟社会の都市のかたち ～コンパクトで持続可能なまちづくり～ 基調公演 京都大学名誉教授 広井良典 主報告 栃木県宇都宮市長 佐藤栄一 一般報告 東京大学国際ppp研究所シニアリサーチポーター 南 学 一般報告 香川県高松市長 大西秀人 一般報告 早稲田大学理工学術院教授 森本章倫 パネルディスカッション コーディネーター 埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授 内田奈芳美 パネリスト （株）みちのりHD代表取締役グループCEO （兼） 関東自動車（株）代表取締役社長 吉田元



まちなか広場研究所主宰	山下裕子
北海道室蘭市企画財政部長	高橋知規
鳥取県米子市長	伊木隆司
行政視察（街なか活性化事例コース）	
宇都宮二荒山神社	
バンバ市民広場（バンバ広場）	
宇都宮餃子会 来らっせ	

4 概 要

◆基調講演

人口減少・成熟社会のデザイン 京都大学名誉教授 広井良典
資源や人材等、地域のあるもの探しをする事が大事

「プラスの価値」を引き出す事、見つける事、創り出す事に関心が高まっている。

幸せはローカルから…若い世代のローカル志向を支援する政策が必要である。

A Iを活用した未来シュミレーションには、都市集中型シナリオと、地方分散型シナリオがあり、8年～10年後までにはどちらかを選択して、必要な政策を実行すべきである。

報告書（継紙）

広井教授の講演の途中で、我が真庭市がSDGS未来都市として紹介された事は、驚きでもあり、また嬉しくもあった。

◆主報告 人口減少社会に対応する都市の構造改革

～100年先も発展できる「ネットワーク型コンパクトシティ」の形成～

栃木県宇都宮市長 佐藤栄一

概ね2030年を見据えた目指すまちの姿として[スーパースマートシティ]を掲げている。このスーパースマートシティはN C C（ネット型コンパクトシティ）を土台として、「地域共生社会」「地域経済循環社会」「脱炭素社会」の3つの社会が「人」づくりの取り組みと「デジタル」技術の活用を原動力に、人口減少社会においても持続的に発展するまちの事である。

休日1万人、平日2万人が利用する基幹公共交通のライトライン。

今は市の東側のみ走っているが、西側へ延ばす計画が進行している。

公共交通は福祉の分野に入る…と言われた事に共感した。

宇都宮市が目指すスーパースマートシティとは、人口減少、少子高齢化に対応する都市の構造改革として、子どもから高齢者まで、誰もが豊かで便利に安心して暮らせる事ができ、夢や希望がかなうまちの事である。

◆一般報告 「縮充」発想による公共施設マネジメント

東京大学国際ppp研究所シニアリサーチパートナー 南 学

公共施設マネジメントを検討すると、縦割りを超える「合理性」がみえてくる。

課題として、

- ① 市民の生命と財産を傷つけないという安全確保。
- ② 限られた財源の範囲で施設を更新、修繕するという縮充。
- ③ コロナ禍での「集落」の否定と、加速されるDXという機能の見直しが必要である。

数多い公共施設運営の固定費（水道光熱費、人件費等）の削減と施設からの収益を図る必要がある。

◆一般報告 都市縮小時代の持続可能なまちづくり

～人が集い未来に躍動する世界都市・高松～

香川県高松市長 大西秀人

高松市丸亀町では、多くの苦勞と試行錯誤を経て

- ① 「都市の回遊性とにぎわいの創出」

報告書（継紙）

- ② 「歩いて暮らせる都市構造」

- ③ 「市民主体の合意形成とルールづくり」がなされた
官民共同のまちづくり、コンパクトシティ+ネットワーク、歩いて暮らせる町、高齢者の居場所づくりが大切。そして、持続可能なまちづくりを追求していく。

◆一般報告 次世代交通とコンパクトで持続可能なまちづくり

早稲田大学理工学院教授 森本章倫

人口減少により、空き家の増加や税収入による都市財政の悪化など、さまざまな都市問題を引き起こしている我が国。現時点では、900を超える自治体で、都市機能誘導区域や、居住誘導区域を設定するなど、コンパクト化政策が広がりをみせている。

◆パネルディスカッション

テーマ 成熟者社会のかたち

～コンパクトで持続可能まちづくり～

コーディネーターの内田奈芳美教授の進行のもと、パネリストの吉田元氏・山下裕子氏・高橋知規氏・伊木隆司氏によるディスカッションが行われた。パネリストの方々の意見として、

- ・楽しい要素を取り入れて、歩いて楽しいまちを作る
- ・若い人～高齢者が集まる事のできる多世代交流の場となる、新しい施設を作る
- ・地域に住んでいる人たちみんなで楽しみを見つける
- ・他の市からのファンを増やす
- ・住民が移動（循環）は快樂であると思えるような市に
- ・みんなで豊かな時間を享受できるように
- ・住民の人に対して、丁寧な説明をすることが大事
- ・町づくりに力を貸してもらえよう、高校生と話しをして提言をもらう

私は、少子高齢化が進んでも、住民が世代を越えて集える場所をつくり、持続可能な福祉社会の実現、そして、楽しく過ごすことができるようにみんなで考えていくことが大事であると思う。

佐藤栄一宇都宮市長、伊木隆司米子市長のお話をお聞きして、市民に対する熱い思い、熱量に驚かされました。私も、住んでみたいまちだな…と思ったものです。

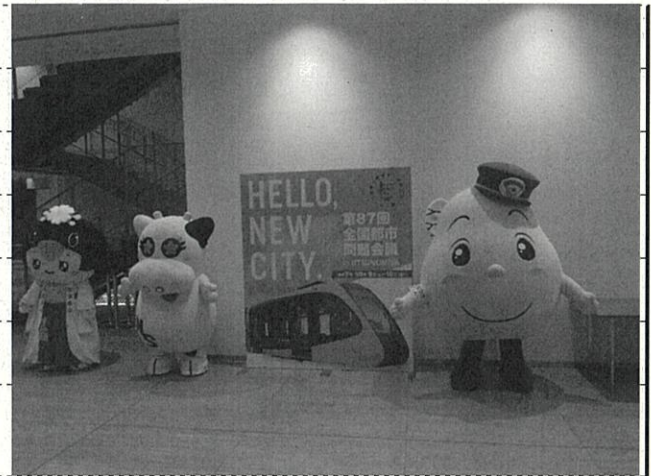
◆行政視察

宇都宮二荒山神社の前のバンバ広場は宇都宮市の市立公園で、憩いの場としてだけではなく、フェスティバルなどのイベント会場としても利用されている。当日も、とても良い天気で、市民の方がベンチに座ってゆったりと時間を過ごされていました。まち中に、このような素敵なお公園があれば、市民の方に喜ばれると思います。

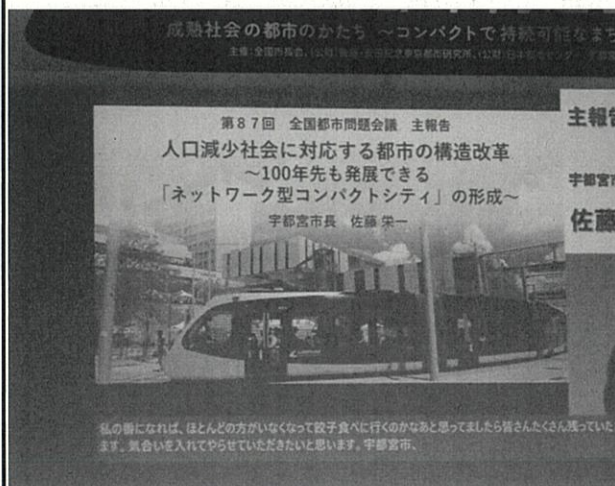
報告書（継紙）



87回全国都市問題会議 会場前



ゆるキャラがお出迎え



ライトライン



広井良典教授の資料



宇都宮二荒山神社



バンバ広場

報 告 書

令和7年 10 月 14 日

真庭市議会議長 長尾 修 殿

報告者 真庭市議会議員 氏名 森 脇 正 和



下記のとおり政務活動費を使用して 研修会をしましたので、その結果を報告いたします。

1	日 時	自 令和7年10月 8日 (午後) 0時30分 至 令和7年10月10日 (午後) 11時00分
2	場 所	栃木県宇都宮市みらい1-20 ライトキューブ宇都宮 ----- ----- ----- ----- ----- ----- -----
3	用 件	第87回全国都市問題会議 ----- ----- ----- ----- ----- ----- -----



4 概 要

開会式の後、京都大学名誉教授広井良典氏による「人口減少・成熟社会のデザイン」と題した基調講演が行われました。いま日本の各地では中心部が空洞化している。郊外に大きなモールを造り自動車移動を中心としたアメリカ型社会から歩行者が歩いて楽しめるヨーロッパ型に変化しつつあることが報告された。次に佐藤栄一宇都宮市長により人口減少社会に対応する都市構造改革～100年先も発展できる「ネットワーク型コンパクトシティ」の形成～と題した主報告が行われた。市内にある各拠点を公共交通で結ぶネットワークの必要性が述べられた。宇都宮駅東側に整備されたライトラインを今後西側にも延伸しその他の拠点は、バスやデマンド交通で結ぶネットワーク型スーパースマートシティを目指して取り組みを進めることが報告された。次に東洋大学国際PPP研究所シニアリサーチパートナー南学氏により「縮充」発想による公共施設マネジメントと題した報告がなされた。成熟社会における公共施設マネジメントは、減少・削減ではなく縮充が必要であること。施設数を減らすから固定費削減を考える。ダウンサイジングで面積削減を実現することが重要であることが報告された。次に高松市長大西秀人氏により都市縮小時代の持続可能なまちづくり～人がつどい未来に躍動する世界都市・高松～と題し、丸亀町商店街の再生プロジェクトの報告がなされた。郊外型ショッピングモールの台頭により中心市街地の空洞化が進行していくなか丸亀町商店街の再生が単なる施設の建て替えではなくまちの再編集を通じ持続可能なまちづくりとして都市の回遊性とにぎわいの創出、歩いて暮らせる都市構造、市民主体の合意形成とルールづくりを行った。行政は、地域の主体的な動きを支える伴走者に徹したことで再生が成功したことが報告された。次に早稲田大学理工学術院教授森本章倫氏により、次世代交通とコンパクトで持続可能なまちづくりと題して報告がなされた。人口減少により都市機能誘導区域や居住誘導区域を設定する自治体が増えるなどコンパクトシティへの動きが見られる。やはり重要なのは、拠点と拠点を結ぶネットワーク型コンパクトシティである。集約エリアは徒歩を中心にウォーカブルなまちづくりを目指す。都市内の移動は次世代型電車システム、快速バスシステム、自動運転バスなど。郊外部では、自転車、パーソナルモビリティ、ライドシェアできる自動運転車、ロボットタクシーなどの導入も活用が期待されることが報告された。

4 概 要

2 日目、埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授内田奈芳美氏をコーディネーターに(株)みちのりHD代表取締役グループCEO吉田元氏、まちなか広場研究所主宰山下裕子氏、室蘭市高橋知規氏、米子市長伊木隆司氏をパネリストに成熟社会の都市のかたち～コンパクトで持続可能なまちづくり～をテーマにパネルディスカッションが行われた。公共交通の持続性については、運賃収入だけでは持続しない官民連携が必要である。公共交通は社会資本の一部との考えが広まっている。拠点づくりの在り方については、郊外ネットワークが大切。多世代交流も必要。次の世代につなぐには、高校生の意見をしっかりと聞いてその世代が現役世代になるとよいものができる。変化をおこそうとした時、納得を得るストーリーとしての在り方では、関係人口のかかわり方、対話が必要。市民の参加みんなで考え行政機関も横のつながり感情的納得を得ることが必要であることなどの意見が発表された。

持続可能なまちづくりにおいては、10年後20年後を見据え若い世代の意見を取り入れみんなで考えていくことが重要であると感じた。

第87回 全国都市問題会議

成熟社会の都市のかたち ～コンパクトで持続可能なまちづくり～

[主催]

全国市長会

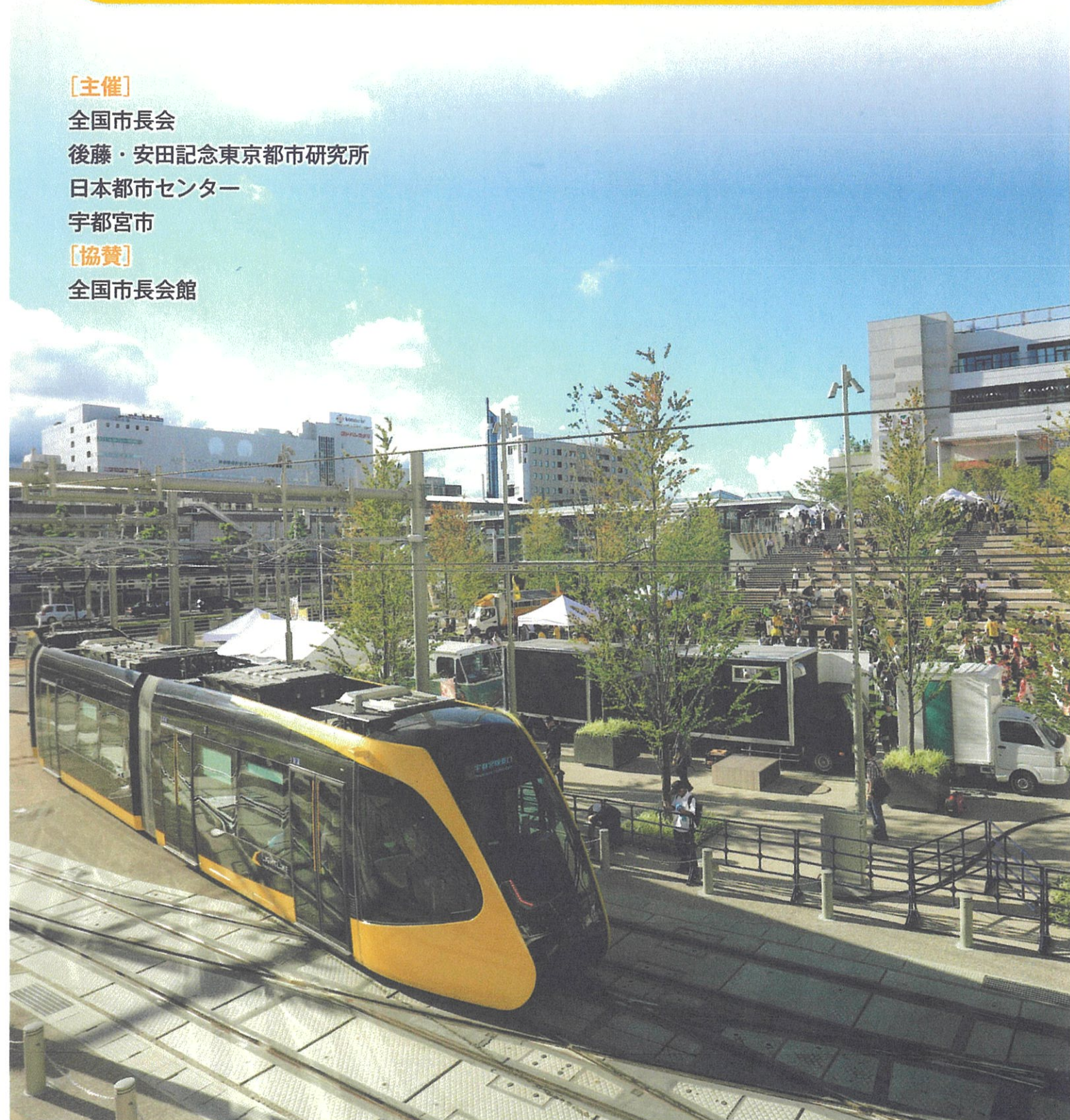
後藤・安田記念東京都市研究所

日本都市センター

宇都宮市

[協賛]

全国市長会館





主催：全国市長会、(公財)後藤・安田記念東京都市研究所、(公財)日本都市センター、宇都宮市

第87回 全国都市問題会議

成熟社会の都市のかたち ～コンパクトで持続可能なまちづくり～

主催：全国市長会、(公財)後藤・安田記念東京都市研究所、(公財)日本都市センター、宇都宮市

岡山県真庭市・・・SDGs未来都市

2018年6月、29都市と先導的な取り組みの10事業(自治体SDGsモデル事業)が選定。真庭市はいずれにも採択された。



3. まとめ

再臨のコツ

- 単に減らす・無くすのではなく、利便性や稼働率の向上といったメリットの説明が不可欠
- 少ない人口でこれまでと同じ数の施設は維持できないという現実の理解促進
- 補助をもらえるタイミングなども重要
- 成功事例などを見せるのも効果的

オマケ

- ハード整備だけでなく、ソフトの取り組みも重要
- 市職員が積極的に市民と関わることで、市民が自発的な活動を始めよう



人口減少が進み財政規模が縮小していく中、どうやって施設の機能を残していけるかと、続けながら進めるということが大変重要。

の関係でシミュレーションを行って参りました。岡山県の間に合わせこちらは太田市長

報 告 書

令和7年10月14日

真庭市議会議長 長尾 修 様

報告者 真庭市議会議員 氏名 西田文子



下記のとおり政務活動費を使用して 調査研究・研修会・要請陳情活動をいたしましたので、その結果を報告いたします。

1 日 時	自 令和7年10月9日（午前・午後）9時30分 至 令和7年10月10日（午前・午後）4時40分
2 場 所	栃木県宇都宮市宮みらい1-20 ライトキューブ宇都宮
3 用 件	第87回全国都市問題会議 基調講演 人口減少・成熟社会のデザイン 京都大学名誉教授 広井良典 主 報 告 人口減少社会に対応する都市の構造改革 ～100年先も発展できる「ネットワーク型コンパクトシティ」 の形成～ 栃木県宇都宮市長 佐藤栄一 一般報告 「縮充」発想による公共施設マネジメント 東京大学国際PPP研究所シニアリサーチパートナー 南学 一般報告 都市縮小時代の持続可能なまちづくり ～人がつどい未来に躍動する世界都市・高松～ 香川県高松市長 大西秀人 一般報告 次世代交通コンパクトで持続可能なまちづくり 早稲田大学理工学術院教授 森本章倫 パネルディスカッション 成熟社会の都市のかたち ～コンパクトで持続可能なまちづくり～ コーディネーター 埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授 内田奈芳美



パネリスト (株)みちのりHD代表取締役グループCEO (兼)関東自動車(株)代表取締役社長 吉田 元 まちなか広場研究所主宰 山下裕子	
北海道室蘭市長 青山剛 代理 企画財政部長 高橋知規 鳥取県米子市長 伊木隆司	
行政視察 二荒山神社とパンパ広場、来らっせ	
4 概 要	○基調講演では、人口減少社会という危機をチャンスに変えて新しいチャレンジで人口を定常化していく。若い世代はポジティブな動きをしている。地方に無いことを言うのではなく、あるものを探す。地元への愛着心を卒論のテーマにしたり、地元への愛着心があり、地域への着陸の時代。 AIにシュミレーションしてもらうと、2050年は都市集中型か地方分散型かと聞くと、地方分散型を選択。東京は出生率が低い。人口が集中するところは出生率が低下する。東京は高齢者が増加。日本・アメリカは自動車、道路中心。ヨーロッパは歩いて楽しめる街、座れる場所がある。商店街が地域に根付いている。ローカルが循環して、ナショナル、グローバルへと積み上げていく時代。 ○主報告 公共交通はもはや福祉の分野に入っている。赤字だから止めることはできない時代。宇都宮市はネットワーク型コンパクトシティを目指し長期にわたる取り組みを考えている。100%再生可能エネルギーで走るライトラインと現行のバスを増便したり、今後は公共交通の空白地帯をなくすため、様々な方法で自動車よりも歩くことで、健康増進し医療費も減らしていく。 「ぴんぴん ひと ころり」ぴんぴんころりではなく、ぴんぴん 一休みしてころりと逝くという意味だとか。電車、バスに乗るために、Suicaのついたtotoraというカードもつくり、小学生に配布し、みんなが使える仕組みにした。地域共生社会はこのNCCを土台に宇都宮市地域で支え合う自治会条例を制定し、自治会の維持と活性化の取組に力を入れている。 ○一般報告 南氏は、公共施設の統廃合について、箱モノを壊す時に、優先順位だけでなくいろいろな見方から判断すること。普段の点検で調整する。拡充の時代から縮小の時代へとネガティブとしてみるのではなく、機能の充実

報告書（継紙）

に繋がるポジティブな未来を描けるという考えから「縮充」という造語を生み出した。小学校、公民館、体育館、図書館を縮充するため、様々な見方をし、すべてを一か所に集約するという方法もある。

○一般報告 大西高松市長は、以前は街の中心でにぎわっていたアーケードが、郊外の大型ショッピングセンターへと市街地が薄く拡大された。地元主導のまちづくり構想をとりまとめ、公共空間の再編も行い、広場を交流やイベントの場として再定義した。行政主導でもなく民間任せでもない、官民連携の都市再生。アーケード街を再開発し、街の顔となる場所を奇麗にして、ブランド化。小さな成功体験の積み重ねが大きな再開発計画を一気に進める。歩いて暮らせる都市構造、近くに車を停めるのに空き駐車場を探すため、質の高いデジタルマップを構築し、どこ駐車ナビ高松というアプリを作った。

○一般報告 森本氏 宇都宮市の都市計画作りに関わり、次世代交通システムをデザインした人。広い市街地を作ってきたことで、それが今足かせとなっている。すべてコンパクトシティにする必要はない。次世代は人中心の交通システム、交通のデザインをしなくてはいけない。いろんな乗り物が必要。多様なモビリティハブの整備が必要。交通手段を作ると都市の形も変わる。

○パネルディスカッション 移動したいときに移動できれば幸せな生活をおくれる。移動自体を楽しむ。また拠点のあり方について

吉田氏は、2029年に158台のEVバスが走ることを目指している。75歳以上の高齢者に1万円の交通ポイントを毎年配布し完全キャッシュレスを目指す。バスは通勤通学だけでなく、観光を上乗せして増便して、公共交通にバスは欠かせないものにしていく。

山下さんは、ゆらぎの時代で、つながりがあれば何かが始まる。中心市街地の広場という空間が役に立つ。まちの主役は人。私たちが街をつくり、街が私たちをつくる。通過しているところに少しの滞留が。既存の人通りを活かす。広場にお店を出し、毎日違う景色を見れて楽しい空間に。

高橋企画財政部長 小中学校33校を15校に27年間で。公共施設の福祉施設を4つを1つに、消防署を5を4に、図書館と科学館を1つに。市民は家の近くの

報告書（継紙）

施設を残したがる。市民が仕方ないよねと思うまで説明しなくてはいけない。

伊木米子市長 人口14万人の市。ウォーカブルで頑張っているのは20万人以上の都市。2つの中心的市街地と郊外と周辺部がある。鉄道の街で、交通の設置点。国土交通省がウォーカブル事業を始めたときいち早く手を挙げた。米子駅に駅裏につながる「がいなロード」を作った。駅裏には何もなかった。50年かけて作られた都市は50年かけてコンパクトにしていかなければならない。

○行政視察 二荒山神社 御祭神は崇神天皇の長男豊城入彦命

式内社の一之宮としてお宮を中心に発展

一之宮から宇都宮の地名の由来とされている

バンバ広場 二荒山神社の参道を挟む市有地

百貨店があったが賑わいの街づくりのため立退

年二回の大イベント 3X3 バスケと

ジャパンカップサイクルロードレースほか

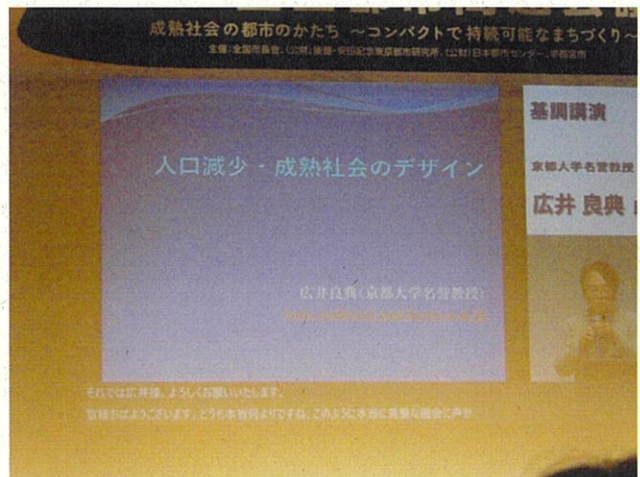
来らっせ 宇都宮餃子会から餃子の街となった経緯の説明

感想 今は物や情報の時代から次の時代へ移行していくとき。人間は今までもいろいろ作り上げてきたのだから、これからも未来を想像してすべての人が楽しく、幸せに暮らせる街をきっと作っていけると思いました。

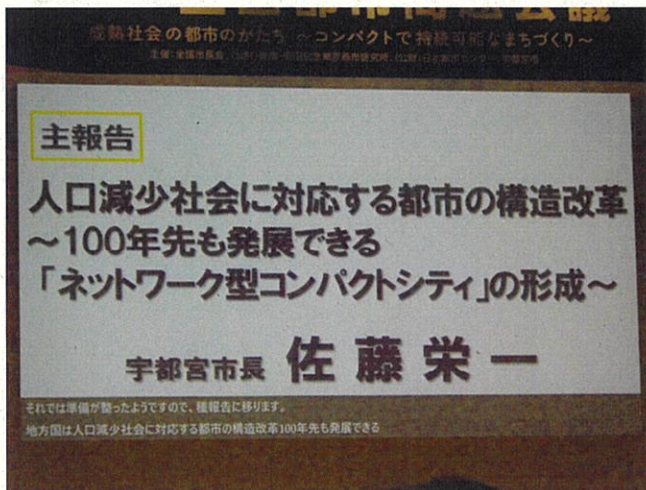
都市問題会議には毎年参加してきましたが、コンパクトシティのあり方が今年は一気に方向性を変えたように思います。それぞれの市の小さな成功事例が大きな変化をもたらしたのでしょう。時間をかければ素晴らしい地域が、生み出されていくと実感しました。



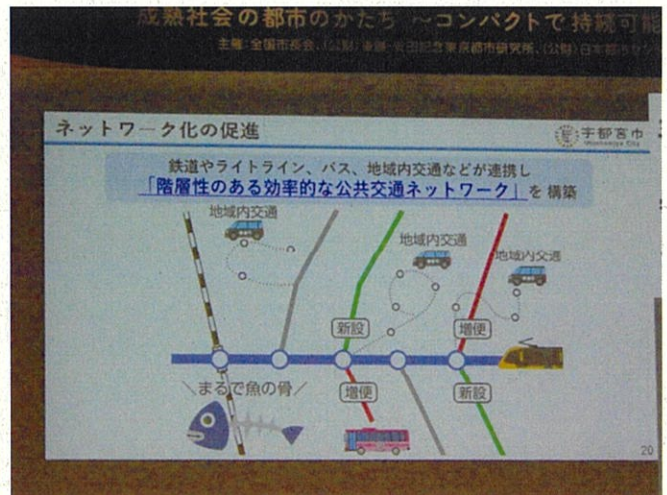
ライトキューブ宇都宮 会場



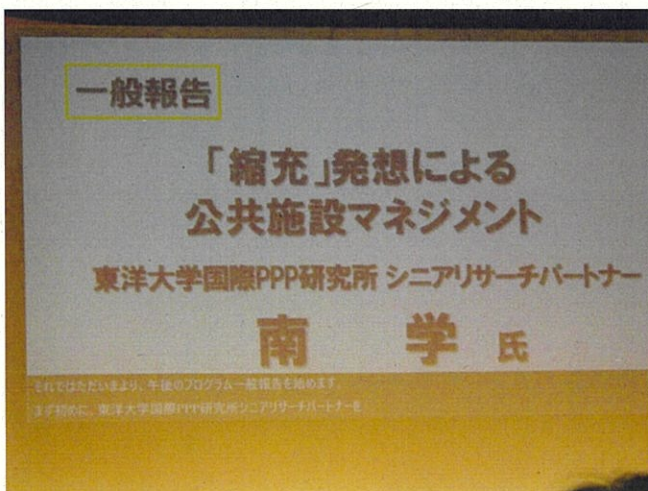
基調講演 京都大学名誉教授 広井良典 氏



主報告 宇都宮市長 佐藤栄一 氏



魚の骨にたとえた交通ネットワーク



一般報告
東洋大学国際 PPP 研究所 南 学 氏



二荒山神社 参道とバンバ広場

報 告 書

2025年10月24日

真庭市議会議長 長尾 修 殿

報告者 真庭市議会議員 氏名 村上善彦 

下記のとおり政務活動費を使用して 調査研究・研修会・要請陳情活動をしましたので、その結果を報告いたします。

1 日 時	自 2025 年 10月 9 日（午前・午後）9時30分 至 2025 年 10月 10日（午前・午後）16時40分	
2 場 所	ライトキューブ宇都宮 ----- ----- -----	
3 用 件	第87回全国都市問題会議 「成熟社会の都市のかたち」 ～コンパクトで持続可能なまちづくり	
4 概 要	10月9日（木） 京都大学名誉教授 広井良典氏による 「基調講演 人口減少・成熟時代の都市とまちづくり」 がありました。 道路と自動車中心に作られてきた都市地域モデルではなく、ウォーカブルシ ティとして歩いて楽しめるまちづくり、子供から高齢者までさまざまな世代が ゆっくりとくつろげる小さなコミュニティ空間づくりという市街地の姿を新 たな発想で考えていく時代になっている。多極でありつつ各々の極は集約的で あるような多極集中な都市・地域像が人口減少、成熟社会の国土像の基本理念	

報告書（継紙）

の1つとして重要なのではないか。地方分散型という方向もそうした在り方とつながってくる。

次に、宇都宮市長 佐藤栄一氏による主報告「人口減少社会に対応する都市の構造改革」では、市街地の外延化の進行により都市機能や居住密度の低下が生じ、中心市街地の活力低下、空き家、空き地の増加、公共交通空白地域の増加、地域コミュニティの衰退という問題が懸念される。長期的なまちづくりの方向性としてネットワーク型コンパクトシティを位置づける。地域特性を踏まえた各種の都市機能を集積する拠点化とネットワーク化で日常生活に必要な機能が充足し市民生活の質や都市としての価値と活力を高める。「宇都宮市地域で支え合う自治会条例」の制定により自治会の活動負担の軽減や退会防止に係る支援策を創設し、地域社会を支える重要な基盤である自治会の持続と活性化に向けて取り組みを強化していく。

東洋大学国際ppp研究所 南 学氏による「縮充」発想による公共施設マネジメント では、公共施設の再編成の課題に際して、縮小しても機能の充実に繋がればポジティブな将来像を描けるのではないかと考えて生み出した「縮充」をキーワードとして活用できると考える。施設の長寿命化や統廃合の可能性に向けて客観的なデーターを収集することで縮充に向けて住民、議会庁内の合意形成の議論の材料を用意することもできる。

高松市長 大西秀人氏による「都市縮小時代の持続可能なまちづくり」
—高松・丸亀町に見る都市の再生と自立性—では、中心市街地の空洞化の課題に対して都市の量的成長から質的再構築への転換が急がれた。丸亀町商店街の再生事業から持続可能な都市運営の新たなモデルを提示する結果になった。
第1に「都市の回遊性とにぎわいの創出」第2に「歩いて暮らせる都市構造」第3に「市民主体の合意形成とルールづくりの成功」である。都市は生き物で人口動態、経済環境、技術革新、ライフスタイルの変化などさまざまな要因に応じて常に再構築が求められる。まちはそこに暮らす人々の手によって再生されるもので、行政はその意志と取り組みを支える土台であり、制度的な装置で、信頼される伴走者である。

早稲田大学理工学術院教授 森本章倫 「次世代交通とコンパクトで持続

報告書（継紙）

可能なまちづくり」 現時点で車社会の次に来る交通社会が確定しているわけではないが、それはさまざまな交通機関が情報通信技術で結ばれ、シームレスに利用できる「人中心の交通システム」であると思われる。交通システム全体のデザインが重要となる。都市を賢く縮退させるためには、コンパクトシティを支える交通戦略を立案すべきである。そして着実に訪れる自動運転社会に対する準備も不可欠である。フィジカル空間では持続可能なコンパクトシティを目指し、サイバー空間では情報通信技術を活用したスマートシティが各種課題を解決する。その有機的な連携が持続可能なまちづくりといえる。

10月10日（金） パネルディスカッション

【テーマ】成熟社会の都市のかたち～コンパクトで持続可能なまちづくり～

コーディネーター 内田奈芳美 埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授

パネリスト 吉田 元 関東自動車代表取締役社長

山下祐子 まちなか広場研究所主宰

室蘭市部長

伊木隆司 米子市長

車社会の進展が地方都市の構造を一変させ、ウォークアブルなまちなみの連続性が途切れてきた。成熟社会におけるコンパクトな都市では、歩いて楽しめる範囲に人の流れと都市構造を誘導する。市民は自らの街や共に生きる人々を知り、真の意味で都市に住むようになる。コンパクト・プラス・ネットワークによるまちづくりでは、拠点を面的に再編し、公共交通で結ぶことにより、利便性と持続可能性の両立を目指す。

「街なか活性化事例」視察コース

宇都宮二荒山神社、バンバ市民広場

宇都宮二荒山神社前の広場では年に数回の催しを行っている。中でもアジア最高峰の自転車ワンデーロードレース「宇都宮ジャパンカップサイクルロードレース」や3人制のバスケットボール「3×3」国際大会の開催など、多様なスポーツ資源を活かしたまちづくりを進めている。